

やカネツケシジミ、タガイ、ヒメタニシ等の貝殻が堆積しており、かろうじて残った水草にヒメタニシやサカマキガイが群がり付いている。隣接する水田にはスクミリングガイも生息していることから、この地の水草の衰退原因は、これら淡水貝類の食害によるのかもしれない。

以上、全国集会の観察地について、この16年間の水草の変遷の概要を紹介してきた。これらは、

香川県における水草相の変遷の一断面ではあるが、ここに紹介した様な水草の衰退傾向は全県的に見られるものである。特にこの数年においては、水の富栄養化に強いとされるヒシ類の消滅が目立っており、平野部だけでなく丘陵部のため池においても、水草が皆無となっている所が目立ち始めた。香川県の水草にとって、厳しい情勢がますます深まっている。



第8回全国集会（1986.9.2～3）福島県・裏磐梯

星 一 彰（福島県自然保護協会）

東北初の集会ということで、初代会長原田市太郎氏をはじめ多くの会員が参加し、裏磐梯の特異な環境についての理解を深めた。

現地研修会で、休耕田利用ジュンサイ栽培地でコカナダモが初確認されたこと、尾瀬沼のコカナダモについての講演が実現したことなどが強く印象に残っている。

マスコミ各社も東北初の集会を報道し、裏磐梯の水草と水質汚濁問題をクローズアップさせることができた。さらに尾瀬の富栄養化問題と、ダム

化により3mも水面が変化する環境破壊について活字化され、多くの福島県民が水草についての認識を深めることができた。

長瀬川水系

猪苗代湖に流入する最大の河川は長瀬川であり、猪苗代湖の水質は、この長瀬川の水質に大きく影響を受けている。集会場の裏磐梯地区は、長瀬川水系となっており、この地区の水質が猪苗代湖の水質に直接影響を及ぼしている。そして猪苗代湖

の水は、明治初期の安積疎水によって、福島県大都市・郡山市の水道源となっている。

コカナダモの分布拡大が、大きな引き金となって、福島県では、特に裏磐梯の水質対策プランを確立し、現在では『猪苗代湖水環境推進計画』が、次代に残そう紺碧の猪苗代湖というスローガンのもとプランされ、現在調査検討中である。

写真は、1999年5月14日猪苗代湖・松橋浜で、天然記念物ミズスギゴケの枯死体が多数岸辺に打ち上げられている場所であり、バックの磐梯山には残雪も見られ、北西の季節風と降雪量が何らかの影響を与えているのではと考えられ調査中である。絶滅が心配されていた天然記念物が再現した。

尾瀬沼

尾瀬沼の中心部を除く沼全体に大繁茂したコカナダモは、その後、量的減少が見られるようになったが、現在も定着しており、以前に多く沼に打ち上げられていたヒロハノエビモがほとんど見られず、コカナダモが岸辺に打ち上げられている。

これらの事実が、多くの福島県民の関心を集めることになった。すなわち沼の富栄養化と水面変化に伴う環境破壊の問題である。

富栄養化対策として、山小屋から排水のすべてをパイプラインによって沼の外に流すことになった。新たな問題も発生することになる。

沼の水は、本来は阿賀野川水系で日本海に流入するのであるが、トンネルによって太平洋に流入されるようになっている。第2次世界大戦中の電力不足によって考えられたプランであり、沼がダムとなっているのである。夏は平常水面より約1m水面が上昇し、冬は約2m下降して、その差約3mとなっている。水草にも多くの影響を及ぼしており、例えば本来は水面で開花するヒツジグサが、水中深く開花している現象なども確認されている。

尾瀬ヶ原に流入する水量も減少し、乾燥化によってヤマドリゼンマイなどが大繁茂する現象も観察されている。

環境破壊の20世紀を反省し、21世紀は自然復元の時代にしなければという反省から、現在、福島県河川審議会において、沼の水を日本海に流入させるよう、その復元策について継続審議となっている。

検討委員会

福島県の水生植物調査や海外の水辺環境調査などを重要なデータとして、現在、各種検討委員会などに参加し、官民の相補的關係を求めつづけている。

環境省環境カウンセラー、国土交通省水辺アドバイザー、美しい国土づくりアドバイザー、福島県環境アドバイザー、河川審議会委員など多くの委員会などに参画し、水生植物を重視した水辺環境について論述を展開している。

尾瀬の場合は、福島、群馬、新潟の3県による尾瀬保護財団が設立され、国立公園の保護と利用の望ましいあり方を追求中であり、財団評議員として、常に生態学的な問題提起をしている。

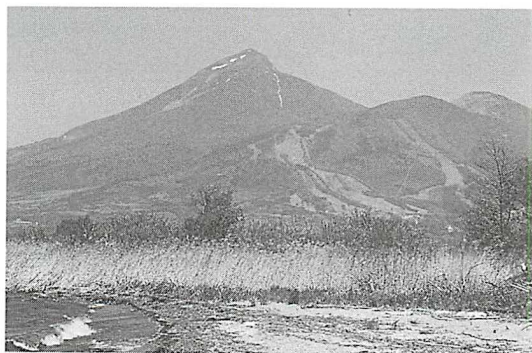


写真1. 猪苗代湖と磐梯山
ミズスギゴケの枯死体が多数打ち上げられていた。

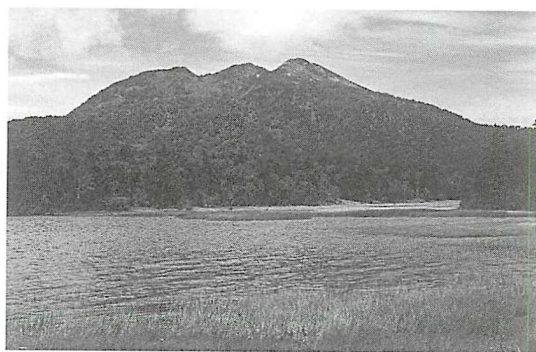


写真2. 尾瀬沼（コカナダモ初確認地）